

## 近代期大阪の空間構造と居住分化

水 内 俊 雄

### 要 旨

大阪は、日本の都市の中でももっとも資本主義的な都市発展を行ってきた都市である。したがって資本主義的都市化が必然的に生み出す都市問題、社会問題をもっとも典型的に経験してきた。同時にそうした問題に対処するための都市政策をもっとも先進的に行ってきた都市でもある。本稿では、特に大阪で現象としてみられた貧困や差別問題が歴史的にどのように展開したかをベースに、政策的な対応についても触れることにする。その分析過程において、地図化を重視し、貧困の状況や政策的対応の地理的な特質を指摘した。また地理的な言説から浮かび上がる当時の大阪の都市構造を描写するために、雑誌「大大阪」の記事分析も行った。

キーワード：空間構造、居住分化、近代都市、大阪、都市社会政策

### I 資本主義の発展段階と都市発展

大阪は、明治期以降の近代化、工業化のもとで、日本の都市の中でもっとも資本主義的な工業化に牽引された都市発展を、経済的・社会的にも、そして地理的にも体现してきた都市である。言い換えれば、資本主義的都市化が必然的に生み出す都市問題、社会問題をもっとも典型的に経験してきた。同時にそうした問題に対処するための都市政策をより先進的に行ってきた、あるいは行わざるを得なかった都市でもある。本稿では、都市問題、社会問題といった、資本主義的な都市発展のマイナスの側面に着目する。相対的に劣悪な居住環境、低収入階層の集住化、社会的な周縁社会の存在のありようが、地理的に空間的にどのように現れてきたのかを、戦前期を対象に、地図化という作業にこたわりながら、例証してみたい。

歴史を振り返ると、植民地主義、帝国主義、産業資本主義といったそれぞれの段階に、それ

にかなった都市が作り上げられていった。例えば、産業資本主義という支配原理は、労働者の街・ブルジョアジーの街、工場、製品を積み出す港湾、そしてそれらを結びつける街路や運河などから成る建造環境を都市空間に生み出していった。特に本稿で注目するのは、国際的な社会集団としての労働者階級の登場を画期とする、19世紀の競争的な産業資本主義の時代であり、この時期において、貧困な労働者階級と資本が共存し対立する場として都市が位置づけられ、現にそうした都市が登場することになった。

20世紀に入ると、フォーディズム的な生産体制が生み出され、独占資本主義的な影響のもとでの都市経営、都市開発の形態が登場した。第2次世界大戦前の戦時計画経済・総力戦体制・ニューディールの計画のもとでは、国家管理型の都市経営、開発が、しばらく支配的となった。戦後、このような都市の国家管理は、ケインズ主義的な混合経済福祉国家システムの都市の中

に、姿を変えて現れた<sup>1)</sup>。

本稿の分析対象は、戦前期の大阪に絞ることになるが、上述のソジャが述べるようなアメリカ型の歴史的発展段階に対応する都市の発展とはいくぶん異なる歴史的文脈を、ヨーロッパも日本も有する。とりわけ1868年の明治維新という画期を、近代都市分析にどのように組み込むかは、世界の都市発展の一類型を提示するという観点から、重要な作業となってくる。

## II 江戸期大坂の都市空間構造

日本の場合、江戸期と明治期との政治体制の大きな断絶により、都市化の歩みは、世界史的にも特異な推移を示した。この日本の都市空間のなかで、都市の貧困性や周縁性はどのように立ち現れたのであろうか。封建時代に身分制に保護されていた都市周縁社会が空間的にも都市の周辺に配置されることが一般的であった。この周縁性という観点からは、穢多、非人から

構成される被差別部落の所在地がまずクローズアップされ、加えて周縁的な性格を有する施設として、遊廓やそれとほぼ同義的な新地、芝居・諸芸小屋、墓所、刑場、木賃宿街の所在地が、そうした周縁の空間として位置づけられた。

図1は、そうした事例の空間的分布をあらわしている。掲載絵図は、大坂の都市絵図において、「最大・詳密」であるといわれる、1806（文化3）年の「増修改正摂州大阪地図全」を使用し、上述の施設の分布をプロットしている。絵図における被差別民の表現については、2001年秋に、大阪人権博物館で開かれた、「絵図に描かれた被差別民」の特別展で、この絵図も含めて、被差別表現を一切抹消せずにそのまま展示、そして図録に掲載した。筆者もこの企画に関わった。図1はそうした流れを踏まえたうえでの描画であるが、個別施設の明示は図1では行っていない。

太線は、大坂三郷の町奉行管轄の町場と在郷との境界線である。たとえば墓所はいわゆる七墓をプロットしたが、大坂の北から東、そして

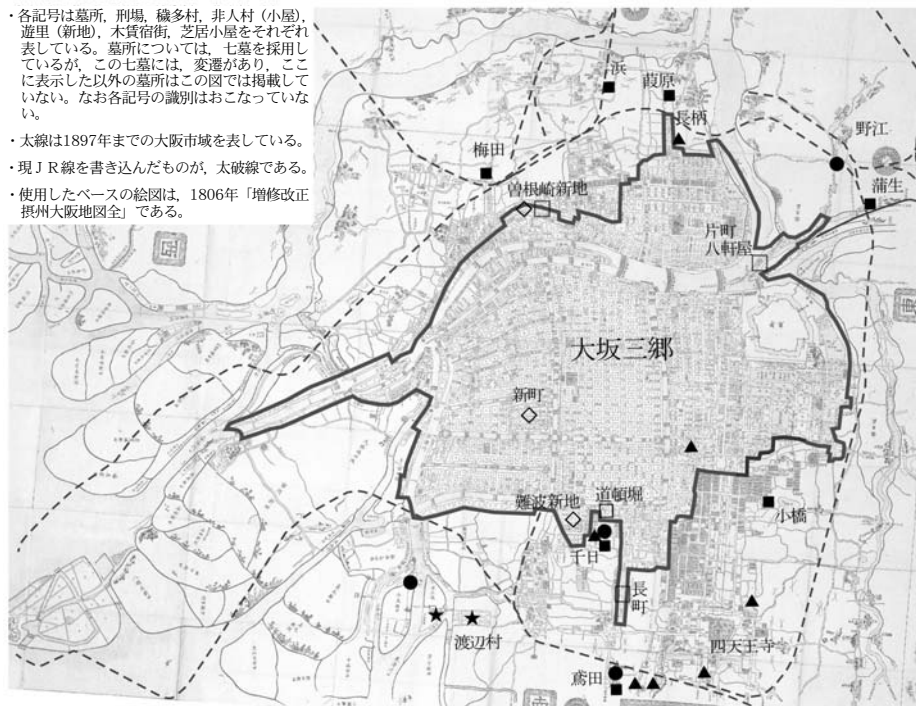


図1 江戸期の大坂と周縁的施設の分布

南に、この境界線のすぐ外側のほぼ街道ぞいに展開する。七墓の中でも南の千日と鳶田は刑場をかかえ、そこに従事する非人の居住地、非人村、非人小屋も墓所の近傍に立地する。この南部周縁部にはまた、1764（明和元年）年に新地造成された遊里の難波新地があり、図1で道頓堀と記した南側には、歌舞伎や義太夫の芝居小屋街、そしてその南には、難波村抱えの千日墓、刑場、非人村が存在する。またその東には、日本橋から住吉街道（あるいは紀州街道）沿いに南にずっと伸びる木賃宿街の長町が存在する。この部分が城下町大坂で公認の木賃宿指定地区であり、城下町エリアに含まれる特異な市街地形態を示す。南に伸びる住吉街道のすぐ東側には、再び七墓のひとつの鳶田墓、そして刑場が現れる。そしてその刑場には非人村が存在する。上町台地崖を東にのぼると、城下町の空間的コンテクストとは別個の、よりはるか昔より存在する四天王寺の悲田院系統の非人小屋がまた立地する。西南には、大坂城下町周縁に位置する大きな規模を有した被差別部落の渡辺村が立地し、その西方には穢多新家や刑場が存在する。

少し規模は小さいが、北部の長柄方面でも同様の空間的セッティングが見られる。街道ぞいに伸びた市街地、七墓のひとつの葭原、そして非人村が配置される。のびは、こうした被差別民の地理的凝集について、「城下町において被差別集落が偏って凝集して賤民空間ともいうべき特異点が形成されることがあると指摘したが、巨大都市大坂でもそれが現出する」<sup>2)</sup>という、まさしく当該の空間がこの図1の境界線の外延に展開されているのである。そして城下町の周辺、そして図1でも表しているが、太破線で描き入れた現在の JR 大阪環状線が同心円状にまさしく周縁の場所を数珠繋ぎにしていたといえるのである。

### III 明治期の大阪周縁部の都市発展

明治期以降、いわゆるこうした「賤民空間」は形式上解体したが、資本主義的な都市化は、「賤民」の系譜を引く一部の地域の都市形成に影響を及ぼすことになる。身分制で庇護された

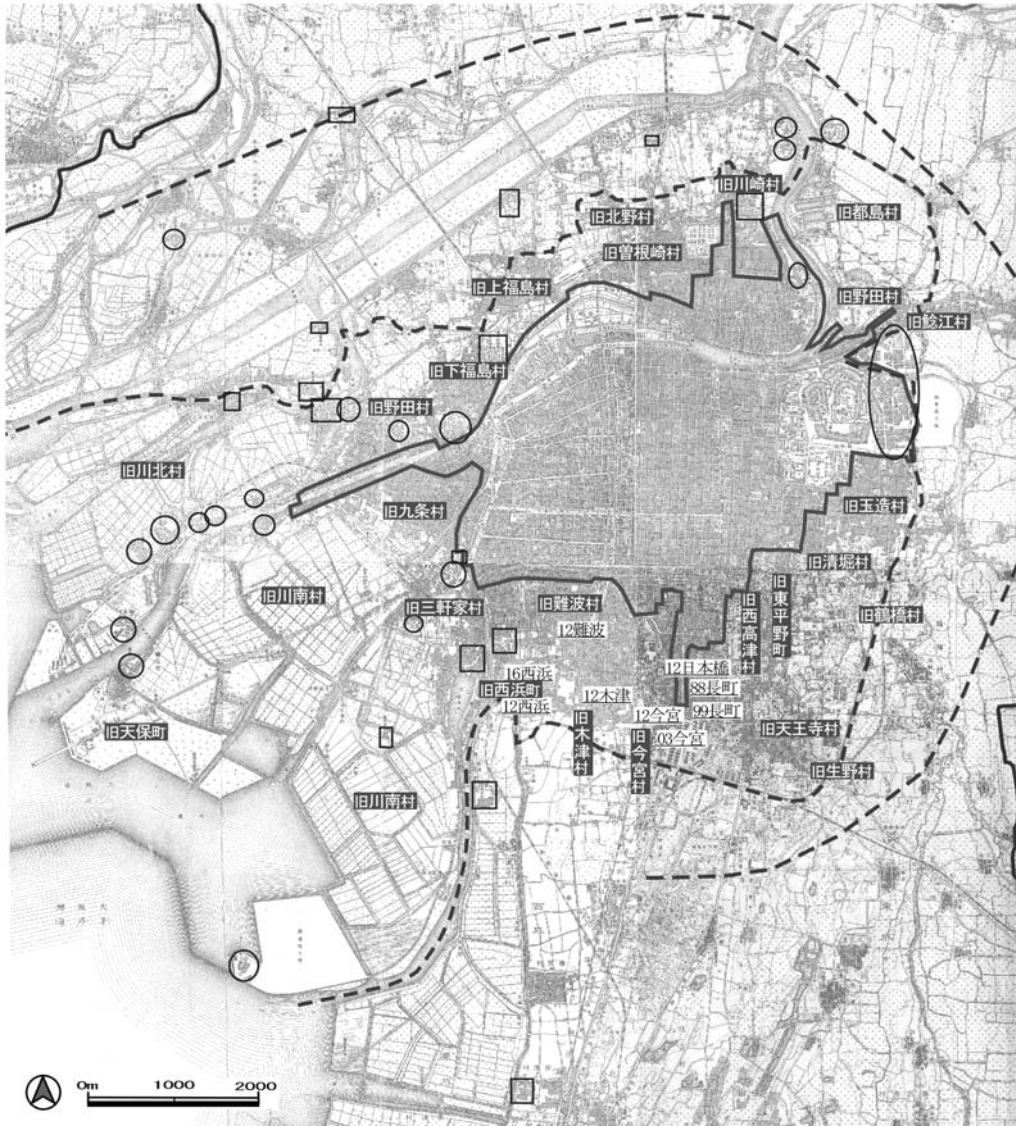
経済的な特権がなくなり、自由競争経済原理の貫徹は、貧困の度合いを強くさせてしまったと同時に、空間的にもむきだしになったことである。身分制のもとでなされた周縁での江戸期の都市雑業層の集住地区を核として、大規模鍾の紡績工業の勃興による寄宿舎居住女子労働者の集住が起こり、より多様な形で、都市貧困層の居住空間が形成されていったことに注目する必要がある。

図2は、明治末期、1908～09年測図の地形図を基図にして、1897年までの大阪市の境界線と、同年以降の第一次編入以降の大阪市の広がりを表している。この両市域の間が江戸期の周縁の空間でもあり、明治期以降の近代都市化のエリアでもある。本格的都市化は1900年代になってからであるが、南部の難波村、今宮村、木津村、天王寺村、東部の玉造村、清堀村、北東部の野田村、都島村、北部の川崎村、曾根崎村、北野村、西部の上・下福島村、野田村、九条村、三軒家村で、顕著な市街地化が見られる。

都市計画的には、この時期の市街地化は、せいぜい将来の宅地化を目的にした耕地整理の手法を導入したにすぎず、いわゆる都市計画不在の、「都市計画」の暗黒時代と称される、低水準の市街地形成となり、狭小敷地、狭小道路、路地を数多く発生させた。すなわち、かつての水田とあぜ道が、そのまま無秩序に急速に自然発生的に市街地化されるか、あるいは、耕地整理で矩形に整形されたものの街区が広すぎ、街区内に路地を発生させ、あぜ道の幅員がそのまま街路化されるなど、いずれも狭小な路地・狭小な宅地で覆い尽くされる。現在の JR 大阪環状線の沿線は、軒並みこうした市街地化の履歴を有したエリアであった。こうした都市建造環境が、バージェスの同心円構造を想起させるように、リング状、ループ状に大阪の旧市街地を取り囲んだのである。このエリアを本稿ではインナーリングと呼ぶことにする。

こうしたインナーリングは1888年の鈴木梅四郎『大阪名護町貧民窟視察記』、1893年の大我居士『貧天地饑寒窟探険記』などでも触れられ、そして1899年の横山源之助『日本之下層社会』にも描かれ、「貧民窟」探索のルポルタージュのターゲット・エリアとなる。ここで用い

近代期大阪の空間構造と居住分化（水内）



- ・ 太線は、1897年までの大阪市域、内側の太破線は、1897年の第一次編入時の大阪市域、外側の太破線は図3を参照のこと。内側の太破線を中心にインナーリングが広がる。
- ・ 白抜き太文字は、1897年の大阪市に全編入、一部編入の町村名。
- ・ 四角は、繊維（紡績）関連工場、円は、繊維（紡績）関連以外の工場（金属、機械、化学など）
- ・ 下線黒字は、調査対象エリア名、二桁数字は、調査実施年の西暦下二桁。  
 88は、鈴木梅四郎『大阪名護町貧民窟視察記』  
 99は、横山源之助『日本之下層社会』  
 12は、内務省実施の「細民統計調査」の対象エリア  
 16は、大阪府警察実施の「部落台帳」調査対象エリア
- ・ 基図は、2万分の1地形図「大阪西北部」「大阪西南部」（いずれも1909年）  
 「大阪東北部」「大阪東南部」（いずれも1908年）

図2 明治末期の大阪の市街地化の状況

られた「貧民窟」という表現の中には、近代期に生まれた下層のまなざしと、旧来からの都市周縁社会への目がないまぜになっていた。

この時期の大阪の描写として横山は、「大阪市にて最も繁華の地なりと称せらるる心斎橋を過ぎ道頓堀に出て候はば難波新地の傍らにし今宮村に通ずる大路有之是ぞ大阪市民にはなが町と呼ばれ常に忌み嫌わるる大阪貧民の住居地日本橋通に候。・・・中略（ずいぶん改善されたことを述べ：水内注）・・・名護町的貧民が大阪の社会に消滅せりと云うにあらずしてその半は場所を変じて今日は天王寺村今宮村難波村の各所に移りて第二の名護町を作りつつあり」<sup>3)</sup>。この市街地拡張の状況は、インナーリングの最初の市街地化として、図2で読み取ることができよう。

また1903年刊行の農商務省の『職工事情』は、当時の小規模工場の労働状況を知ることのできる非常に貴重な報告書である。たとえば大阪南部の今宮のマッチ工業の記述では、「隣寸工場ハ多クハ市街ニテモ所謂町端二位シ貧民部落ト相遠カラサル」<sup>4)</sup>と描写される。この今宮村は、江戸時代までは農村で、計画的に規則正しい街路を有する城下町エリアに南接していた。日露戦争での軍靴や鞍の需要増大により皮革工業を一躍発展させた被差別部落である西浜にも近接して、図2のように、自然発生的な市街地が張り付いてゆく。こうした居住空間は、上のような記述にうかがわれるように中小工業や都市雑業的な労働者の集積により成立した。横山らが述べる名護町から転じた新しい下層社会とは、空間的にこうした場所を指していた。

一方、日本の初期の工業化を支えた紡績工業は、当初より女子労働力を寄宿舍に集中させる傾向にあった。図2のように創設当時は既成市街地からは少し離れたエリアに登場したが、その後の周辺の市街地化により、その寄宿舍は結局、インナーリングのいわゆる上述の「貧民窟」と近接して立地するケースも多かった。

このような都市状況に対して、それが都市社会の安寧を損なうものとして、貧民そして細民社会にまなざしを向けた内務省官僚による都市社会政策への認識を生み出し、その先駆けがまず細民調査という形で、明治末期から課題化

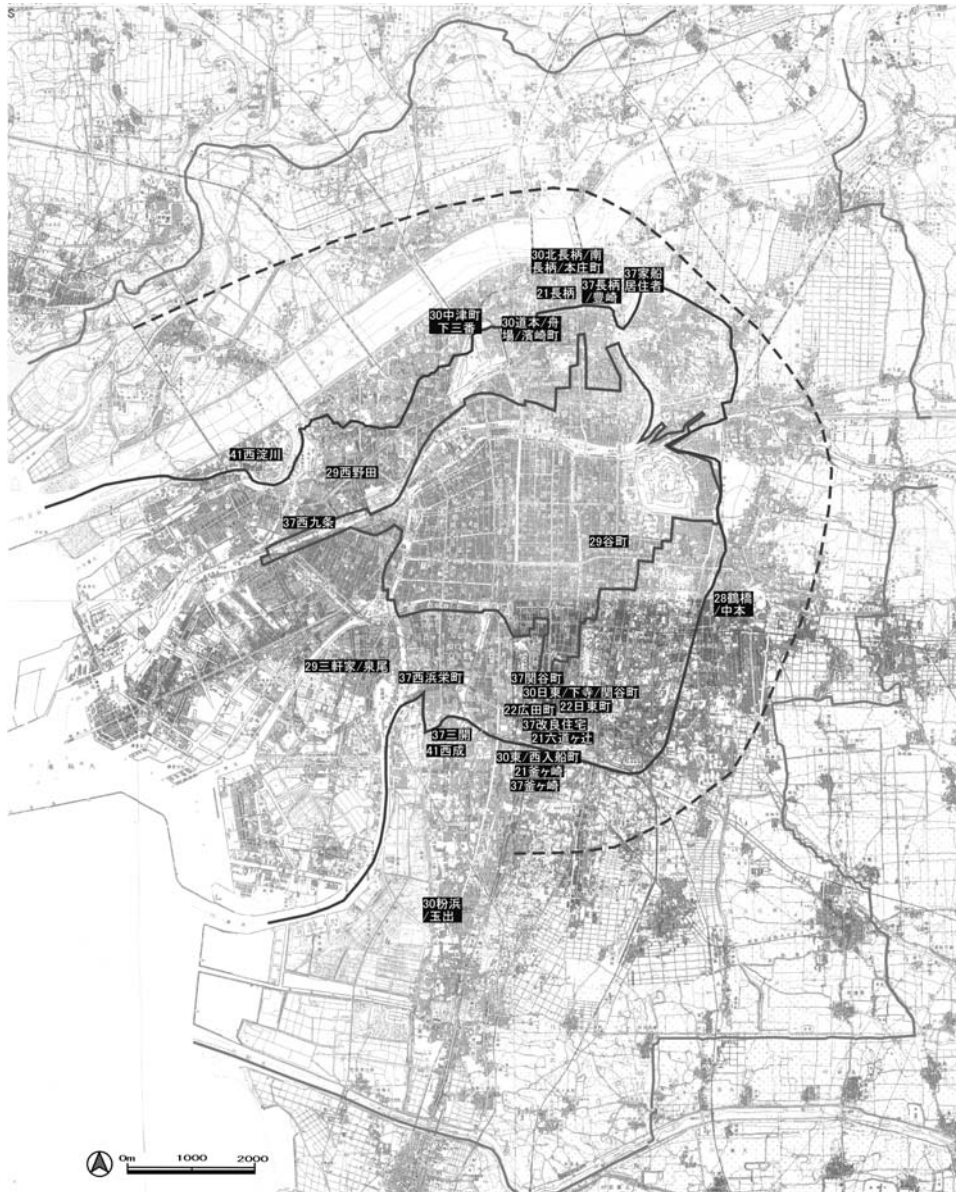
されてゆく。その最初は、1911年の東京、そして1912年に東京と大阪で実施された細民統計調査であった。大阪では図2のように難波警察署管内の日本橋、今宮、木津、西浜、難波などの派出所管轄エリアであり、典型的な都市雑業層、小規模工場労働者の街を対象としていた。また大正期に入ると、大逆事件の影響もあり、部落への注視もはじまる。1916年の警察による部落住民の悉皆調査である部落台帳作成も、図2のように、西浜および隣接の木津北島町に対して行われる。

#### IV 大正期から昭和前期の居住分化の進行

1918年には、大規模な都市騒擾となった米騒動が勃発する。そして大正後期には都市街頭型の労働運動も高揚する。こうした激しい都市社会運動や労働運動に最も敏感に反応したのは、内務省であり、大都市政府であり、本稿の文脈からは、内務省社会局であり、大都市政府の社会部、社会課であった。有名な大阪市の「労働調査報告」、後に改め「大阪市社会部報告」は、1919年から1942年までの24年間に、報告書260冊として世に問われた。調査対象は、俸給生活者・教員・商人から、工場労働者・都市雑業者、水上生活者あるいは不良住宅地区・貧困階層居住地区などであり、不良少年、少女といった調査も含め、全般的な労働・生活実態調査が繰り返された。

図3は、この社会部調査報告を中心にして、地域を対象とした調査の調査年西暦下二桁と調査地名をプロットしている。その嚆矢は、1921年調査の内務省社会局による細民集団地区調査であり、その対象地区、六道ヶ辻（日本橋筋）、釜ヶ崎、そして長柄の3箇所であった。そのすぐ後に、社会部の調査で最初の地域社会調査である「密住地区」の調査が行われる。対象地区はやはり日本橋筋を東西に挟んだ日東町、広田町であった。大正末期において、一連の調査は、既に不良住宅地区改良法の施行を前提に、いわゆるスラム地域の住宅改良地区の選定のためのものという意味合いも強かった。図3に見られる1930年の調査は、後にスラムクリアランス

近代期大阪の空間構造と居住分化（水内）



- ・ 白抜き文字は、大阪市社会部調査による地域調査の対象エリア名、二桁数字は調査年の西暦下二桁
- ・ 21は、1921年内務省実施の「細民集団地区調査」の対象エリア
- ・ 22は、1922年大阪市社会部「密生地区住居者の労働と生活」の対象エリア
- ・ 28,29は、1928,29年実施の大阪市社会部「〇〇方面に於ける居住者の生活状況」の対象エリア
- ・ 30は、1930年大阪市実施の「過密住宅地区調査」の対象エリア
- ・ 37は、1937年大阪市社会部「改良住宅に於ける居住者の状況」の対象エリア
- ・ 41は、1941年実施の大阪市社会部「幼児生活環境調査」の対象エリア
- ・ 基図は、2.5万分の1地形図「大阪西北部」「大阪東北部」「大阪西南部」（いずれも1932年）  
「大阪東南部」（1929年）

図3 昭和初期の大阪と社会調査

・改良事業エリアが具体的に選定されたと考えてよい。特にこの南部地域の日本橋筋と釜ヶ崎にいたるエリアは、こうした調査で何度も選ばれることになる。この南部と同様にこうした社会調査対象に選ばれた北部の天六・長柄周辺では、当時の事業量の限界からか、実際の不良住宅改良事業地区としては選ばれなかったが、後述するいくつかの社会事業の施行対象地区になっている。

当時、細民街・貧民窟・スラムと呼ばれたエリアは、一般的には都市内被差別部落・日雇労働者地区・都市雑業層集住地区として分類され、大都市のインナーリングに存在した<sup>5)</sup>。図3でプロットされている地区は、この3タイプが基本的に選ばれているとともに、1920年代中ごろから、こうした地区の周辺にある零細工場地区に、植民地化された朝鮮半島出身者が移住して、民族的な居住分化を伴いつつ、その集住の場所をインナーリングに付け加えていった。民族的な集住の地区として、沖縄出身者の集住も並んで進行した。朝鮮人の居住については、図4に見られるように、現生野区、東成区、西成区、大

正区を中心に集住がはじまり、沖縄出身者も図4で判明するように、大正区、西成区、港区、此花区などに、一部天六、京橋方面といった内部のインナーエリアにもその分布が見られた。

こうしたいわゆる内務省や大都市政府が呼ぶところの都市困窮世帯にあたる「細民」の居住地区の地理的分布は、当時の大阪の居住分化の進行をよく物語っている。具体的な指標で見ると、たとえば図5の低家賃住宅の分布については、南部と北部のいわゆる細民居住の集中する地区が顕著に見られ、この他にインナーリングでは、西九条や東部の城東線（現 JR 大阪環状線）の東側の現在の城東、東成、生野区方面に低家賃住宅の集中がみられる。もちろん外郭部の現西淀川区や住之江区、鶴見区での低家賃住宅の比率の高さは、より外方に位置する家賃の距離減衰効果が働いていると解釈できよう。一方、住民の困窮度を直接あらわす被保護世帯員率の分布を表した図6によると、南部の日本橋、今宮、木津、西浜エリアと、北部の天六周辺の長柄、豊崎、本庄エリアに被保護世帯員の集中が見られる。

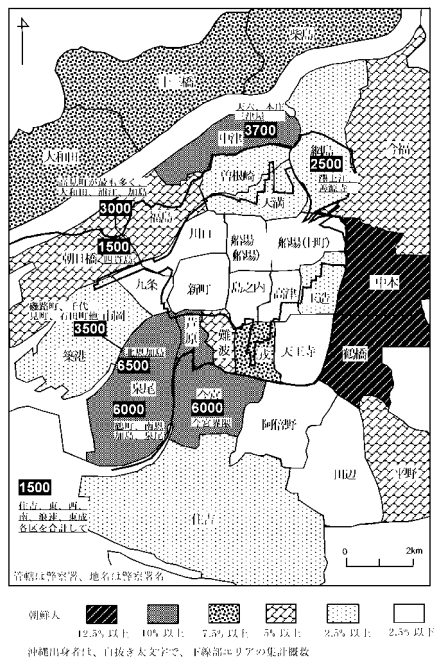


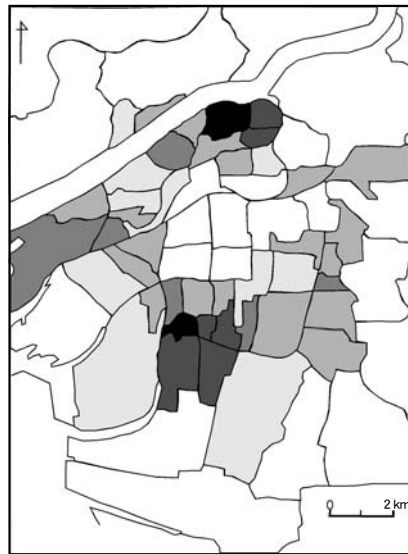
図4 朝鮮人（1938年）・沖縄出身者（1935年）の分布  
 資料：朝鮮人：「大阪府警察統計書」昭和13年12月31日現在  
 沖縄出身者：関西沖縄興信社『関西沖縄興信録』1935年



図5 低家賃住宅の分布（1928年）  
 資料：大阪市社会部『大阪市住宅年報・昭和3年版』



近代期大阪の空間構造と居住分化（水内）



被保護世帯員  
地区人口

|        |       |
|--------|-------|
| 1.5%以下 | 5~10% |
| 1.5~3% | 10%以上 |
| 3~5%   |       |

注：大正7年から昭和3年までに方面事業を開始した地区を対象とした。白地の地区は昭和4年以降事業を開始している。数字は大正7年から昭和7年までの平均である。

図6 被保護世帯員の分布（昭和初期）

資料：『方面委員事業年報』



俸給生活者  
有業人口

|            |            |
|------------|------------|
| 14.0%以下    | 24.2~29.3% |
| 14.1~19.1% | 29.3~34.2% |
| 19.1~24.2% | 34.2%以上    |

図7 俸給生活者の分布（1925年）

資料：大阪市社会部『本市における失業者の分布状態』，1926

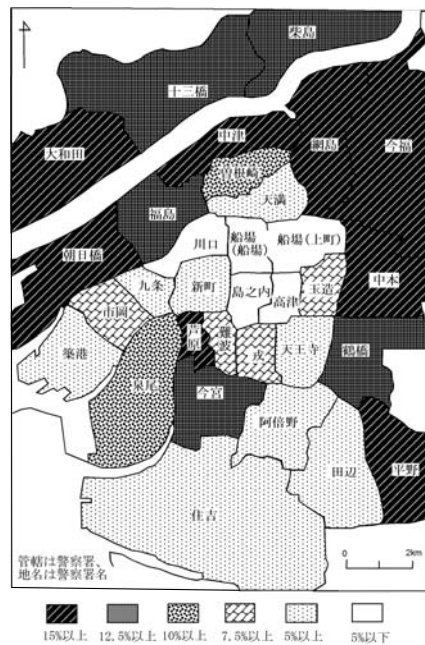


図8 工場労働者の分布（1938年）

資料：『大阪府警察統計書』昭和13年12月31日



この分布とは対照的に、俸給生活者の居住地分布については、図7のように、今までの南北のそれぞれの「細民」の集住地区ではその率が極めて低くなり、江戸時代からの伝統のある旧市街地と、上町台地上の天王寺、阿倍野、田辺エリア、そして築港方面の俸給生活者の居住率が高くなっている。この時期にはすでに、極めて高収入を得ている会社役員や高給を得る俸給生活者、自営業者たちの間で、大阪市内から抜け出し、電車通勤による郊外居住が広まっていたが、市内や上町台地上での居住も特徴的であったことは指摘しておきたい。

一方工場労働者の分布を見ると、図8のように、南部では芦原と今宮エリアがやや高くなり、北部では天六、長柄や豊崎、本庄よりもやや広範な範囲となっている中津エリアが高くなっていると同時に、西部の現此花区の朝日橋、現西淀川区の大和田、そして東部の現城東区の今福、東成区の中本エリアなどが高くなっている。1930年代には、職工という労働階層が都市に確固たる地位を築き上げた。これらの労働者たちは、比較的良質な長屋に居住し、いわゆる下層社会とは空間的にも明白に居住の分化が進行していた。この工場労働者の中からは、大工場に勤める主に朝日橋エリアに立地する西六社勤務の職工に代表される、高給工場労働者も生まれ、その近辺には職工街と呼ばれる中小工場労働者の居住地区とは異なる生活世界も存在することになった。すなわち工場労働者の集住地区の中でも居住分化が見られたのであるが、このことは後述する。

このように、新たな俸給生活者の増大に伴い、より鋭い居住分化が、中間階層の郊外居住について見られ、阪神間の郊外住宅は、私鉄沿線に広がり、都市の生活圏は一挙に広がった。豊かな点在する郊外住宅地と、密集する市街地の中の職工街、そして下層社会が居住する「貧民窟」という、分極化した都市空間編成が、日本では1930年代に、大都市を中心に登場したのである。

ここで空間構造を概括すると、江戸期大坂の北部と南部、とくに南部の周縁性の高い、歴史的市街地を取り巻く同心円構造をベースに、明治期以降の資本主義的工業化に牽引される都市

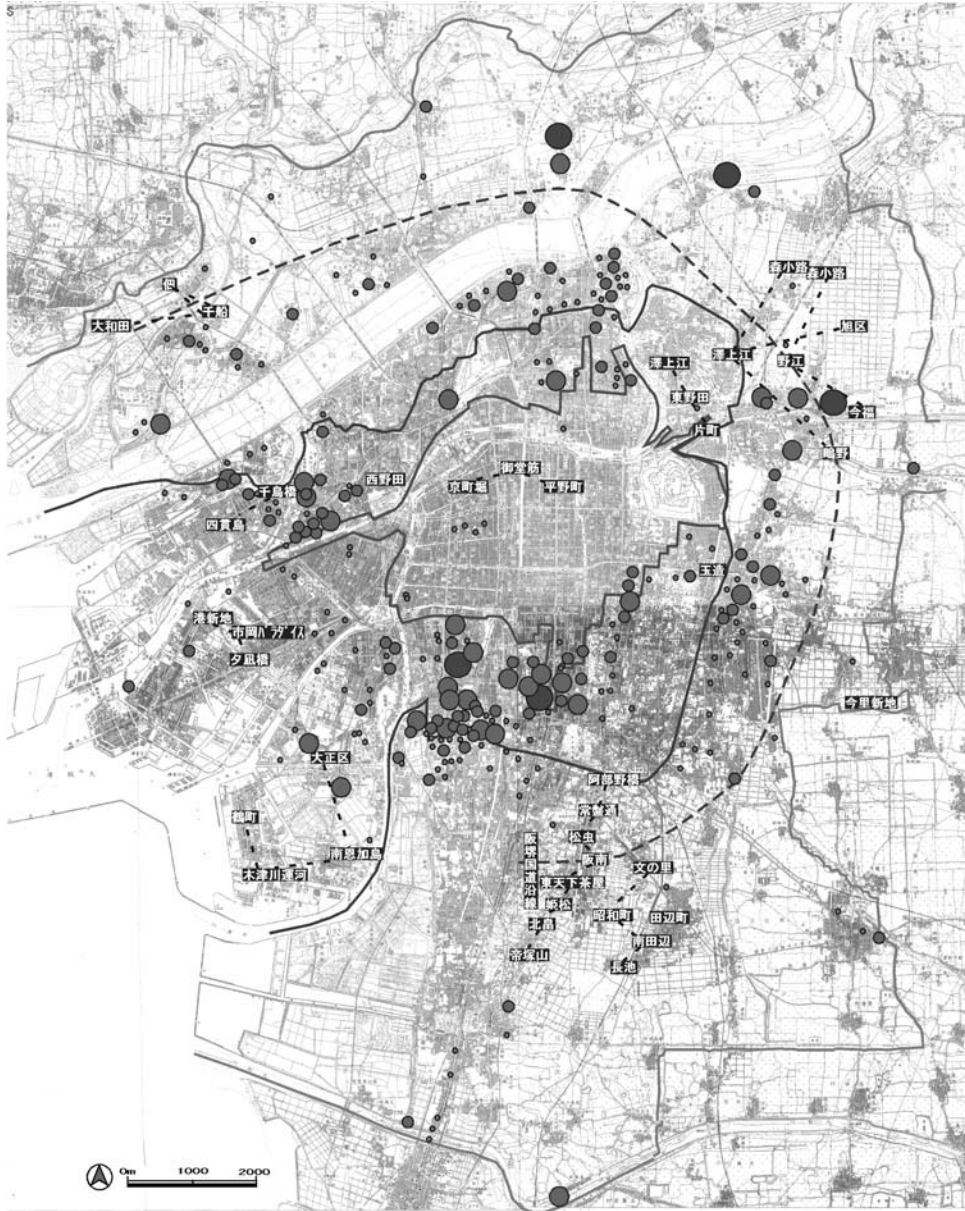
化では、シカゴの都市発展をモデルにしたバージェスの同心円構造が基本的に踏襲される。江戸期に既定されたこの南北に際立つ周縁構造は、大正後期から昭和前期の貧困性を指標にした大阪の空間構造を強く規定している。日雇・都市雑業の都市労働市場をベースに中小零細工場労働者が集住し、その周辺にエスニックな居住分化が、特に朝鮮人、沖縄出身者などの集住によってきわめて特徴的になる。と同時に、上町台地上の天王寺から阿倍野、田辺方面には、俸給生活者のモダンな都市生活空間が優越し、また築港方面にもそうした俸給生活者の色合いが、職工との混住という形で進行する。そして大工場勤務の工場労働者の居住空間が北西部に見られるという、同心円をベースにして、セクター的な分布が部分的に入るという空間構造が成立し、居住分化が進行したのである。

大正後期になると、1919年の都市計画法を契機に、ようやく高水準の市街地を建造する法的基盤として、土地区画整理に関する法制が整備された。以後、こうした自然発生的な都市建造環境をもつインナーリングの外側に、土地区画整理の施工された計画的な郊外市街地が、本稿で名づけるアウターリングが大規模に登場してくる。こうした計画的な開発エリアは、図9のように、インナーリングの外側にはほぼ同心円状にはりついてゆき、描画されている不良住宅地区は、ほぼインナーリングに分布しているように、アウターリングは、都市計画の施行により、住宅地区の不良化をとどめる大きな期待を担っていた。

## V 都市社会政策の展開

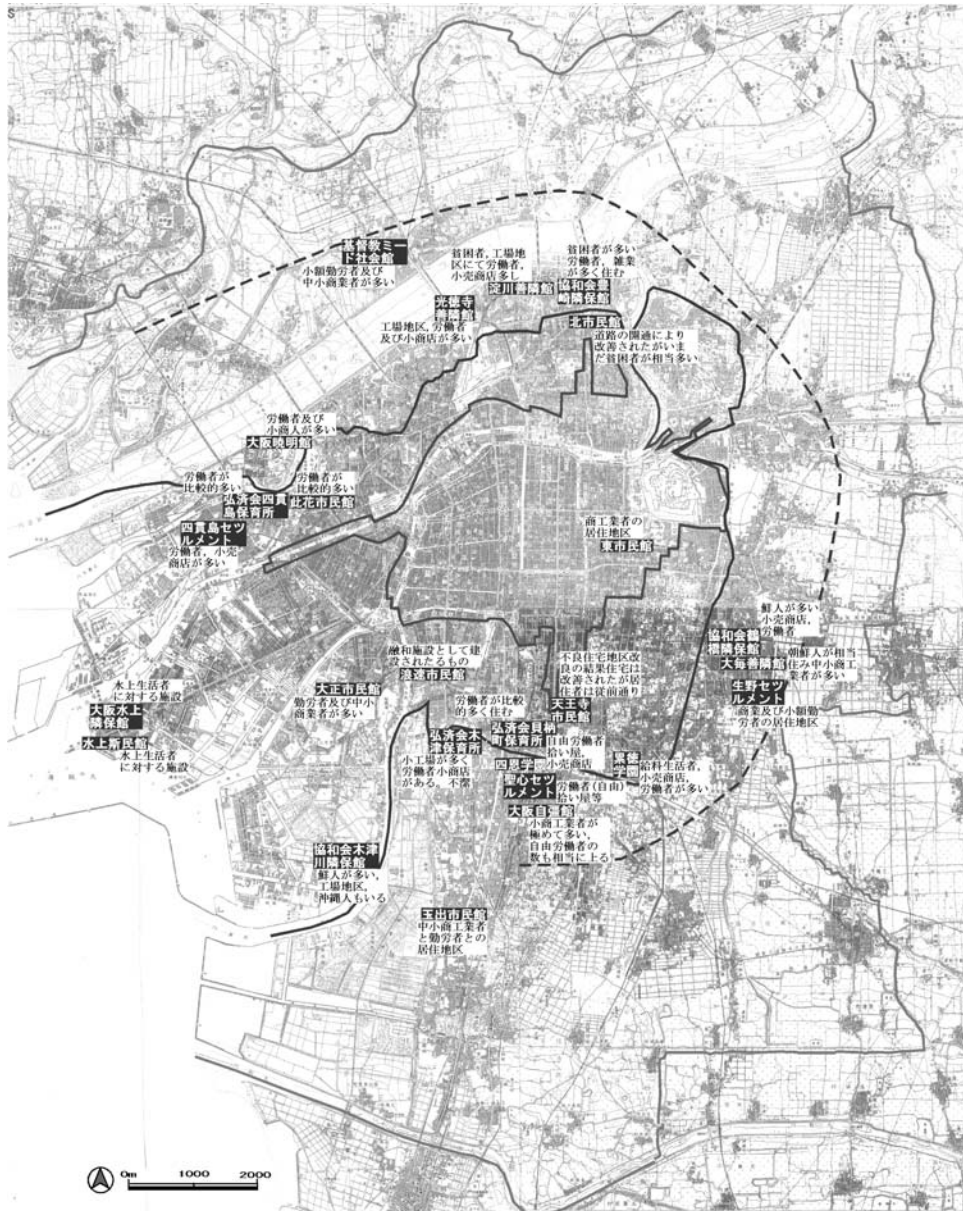
こうした先鋭化した居住分化をもつ都市空間編成に対して、「名市長」と呼ばれた大阪市長関一は、都市政策的、都市計画的な介入を日本の大都市では先陣を切って行うことになる。その成果として、1920年代後半から30年代にかけ、共同宿泊所・市民館・公営住宅などの施設を、都市社会政策の一環として市内に配置し、労働力再生産を円滑にさせる建造環境を作り出した。同時に関市長は、高速交通機関建設（地下

近代期大阪の空間構造と居住分化（水内）



- ・ 白抜文字は、雑誌「大大阪」の1932年から33年にかけて連載された、大大阪新開地風景で、記事対象エリアにされたところである。太字間の太破線は、同じ連載で掲載されたところを結んだものである。
- ・ 外側に描かれた太破線は、その外側をアウトerringと呼び、都市計画にもとづいた土地区画整理事業が代替的に行われたエリアとなる。
- ・ 塗り円は、不良住宅地区の分布を示す。  
最大円は301戸以上、大円は101戸以上、中円は50戸以上、小円は10戸以上50戸未満  
大阪市社会部「本市に於ける不良住宅地区調査」1939年所収地図より
- ・ 基図は、2.5万分の1地形図「大阪西北部」「大阪東北部」「大阪西南部」（いずれも1932年）  
「大阪東南部」（1929年）

図9 昭和初期の大阪と不良住宅地区分布，新開地風景の対象エリアの分布



- ・白抜文字は、大阪市社会部「本誌に於ける隣保事業」1937年に掲載されていた施設名。説明はこの施設紹介に使われていたものである。
- ・基図は、2.5万分の1地形図「大阪西北部」「大阪東北部」「大阪西南部」（いずれも1932年）  
「大阪東南部」（1929年）

図10 昭和初期の大阪と隣保事業の展開

鉄御堂筋線）や郊外住宅地区を視野に入れた、都市圏というスケールでの大都市空間の効率的構築もあわせて計画した。

産業資本主義的な自由放任により編成される都市空間に、道路拡幅などの都市改造で受身的に対応するのではなく、より前向きに、郊外の道路ネットワークと良好な市街地をアウターリングに積極的に作り出し、健全な工場労働者やホワイトカラーの居住地とするという、都市計画による居住分化が結果的に進行し、都市の貧困はインナーリングにとどめ、これが郊外のアウターリングにあふれ出ないようにコントロールするという効果を結果的にもっていた。

そのインナーリングに対する関一市長体制の大阪市の処し方は、図3で見られた不良住宅地区への何度かの調査で本格化する。同時に居住分化を反映して、1928年から30年にかけて、以下の五ヶ所、朝鮮人居住の多い鶴橋・中本方面、中小工場労働者の多い三軒家・泉尾方面、大工場勤務の職員の多い西野田方面といった代表的なインナーリングに、商工業者の多い谷町方面は旧城下町エリアにあたり、旧集落であり中小商工業者の多い粉浜・玉出方面はアウターリングに属するなどの、それぞれの特徴を有する特定地域の社会調査を行った。都市細民だけでなく、多くのタイプのいわゆるプロレタリアの生活世界、社会空間をとにかく明らかにしようという姿勢を打ち出している。

また「『何らかの意識を以て』『地区に住む人達に』『その精神的物質的貧困を補給してやる』と定義される隣保事業の展開については<sup>6)</sup>、このインナーリングの社会施設としてはもっともふさわしいものとなった。図10のように、そのすべてが、アウターリングではなく、郊外の計画的市街地最前線より内側のインナーリングに集中して立地しており、地域の状況記述も、インナーリングの居住分化の状況をよく物語っている。南部のインナーリングでは、不良住宅、自由労働者、拾い屋、不潔といった表現が目につく。また南部の被差別部落エリアに対する融和施設の立地も見られる。こうした叙述は北部のインナーリングでも、貧困者や雑業といった表現でやはり同様の特徴が見られる。東のインナーリングでは、朝鮮人、鮮人といった表現が

目につき、その集住が強調され、これは西南部インナーリングの大正区方面でも見られる。ここでは沖縄人の集住も指摘される。西部の水上生活者については、1930年の調査では、4000人以上を数え<sup>7)</sup>、特異な隣保館といえる。北西部のインナーリングの現此花区や福島区方面では、労働者、すなわち職工を主にして、小売商がミックスした労働者の居住地となっていることがうかがえる。

いずれにしても、上からの施策、処方という形態で、多くの目が注がれ、調査が行われ、曲がりなりにも社会施設が登場したわけである。そしてその施設の用途は、当時の大阪のインナーリングの状況に対応するものであり、その分布は集中的に見られたのである。では、こうした都市社会政策を打ち始めた関市政の政策主導や、見えざる資本主義に導かれた都市発展の地理的諸相、その空間構造や居住分化は、どのように語られたのであろうか。

## VI 雑誌「大大阪」に描かれた昭和初期大阪

当時の大阪の地理的諸相、その空間構造や居住分化を調べる上では、大阪市の広報ジャーナルの性格が強かったとともに、知識人と称される人々の執筆も数多かった雑誌「大大阪」が格好のメディアとなる。この雑誌の性格上、大阪市内の地域ネタの記事は比較的多く、とりわけ1932年7月から33年11月にかけて13回連載された「大大阪新開地風景」はその豊富な地理情報を提供してくれる。それはあくまで知識人の有する大阪の都市空間心象地理であり、その叙述の持つ限界を認識しておくとともに、その言説が大阪の心象地理をまた再生産したことも間違いない。

選択されたエリアの立地は図9のようになる。江戸期からの歴史的市街地からは、京町堀／平野町のみ選ばただけで、あとはインナーリングと、土地区画整理が全面開花する、昭和期の開発前線エリアである太破線の外側のアウターリングに集中している。インナーリングにおいても、既述してきた社会調査で何度もター

ゲットとなった南北の核心のエリアは選ばれていない。

#### VI-1 インナーリングの盛り場から

具体的に見てみると、インナーリングの中でも、江戸期の歴史的市街地にもっとも接するエリアの、東部の京橋方面、玉造方面は、ソーシャルミックとも呼ばれる、さまざまな階層の混住した状況であった。玉造は第三階級市民ではなく、労働者たる第四階級の街の典型地区として形容される。

第四階級の街だ。街の人達は、ただほんの買物に出てくるだけだ。ただほんの享楽をしに来るだけだ。ほんのただほんの。・・・中略・・・この通りには朝日座、玉造座、ヤマト館の三つの活動小屋と、万歳小屋が一つある。・・・中略・・・何れも安価で、興味あるプログラムをつくって、一日の享楽に足れりとするものがある。次に安カフェであるが、五銭のコーヒで、一時間、エロ、グロの宮殿に遊ぶことが出来る。その数については、凡らくわれ等の想像を赦さないであろう。あちらの小路、こちらの小路、軒並みに、向い合って、鳴るは鳴るはジャズ小唄。・・・中略・・・。僕はこの街自体が、平面的な百貨店と感じるのだ。高島屋へ行かなくとも十銭で、ちょいとしたものも買えるし、腹の膨れるようなものも売っている。割引券さえあれば映画も見られるのだ。十銭享楽の街だ<sup>8)</sup>。

玉造は、インナーリングの東部であるが、駅は、城東線（現 JR 大阪環状線）が電車化・高架化で、一挙に都市内高速鉄道機関の結節点として機能することになった。おりしも市電の東部への延長もあり、東部の結節点として当時の新興の盛り場型市街地の状況が描かれている。あらゆる種類の労働者が一時の享楽や消費を安価に行う場所として、それがまさしく第四階級、プロレタリアの街として描かれている。

この玉造より小規模ではあるが、東北部のインナーリングの京橋近辺も同じような状況が現出する。このエリアは第二の玉造と実際称される。

表通りには、近頃、急に安飯屋や大衆食堂が殖えた。薄給のサラリーマンや、労働者、殊に自動車の運転手相手の経営である。同時に、また土地にふさわしい怪しげなカフェーが続出した<sup>9)</sup>。

この京橋付近の地理的な後背地では、商工業者、俸給生活者や日雇労働者などの見事な混住が描かれている。そこには安上がりの街がどんどんこしらえられてゆく状況が見て取れる。

このあたり（片町：水内注）の表通りの、概して小商工業者について、家内工業者が多く、役所向きの勤人、日雇労働者、行商人、出稼人等の居住者が多い。斯うした事象は単に片町方面に限られたことなく、東野田、中野町、澤上江町一帯も同断であるが、東野田方面は、古くからあるいは土着人同然の長屋居住者のほかに勤人階級の居る街筋が、ところどころに存在させているそして未だに茅葺屋根で紅殻塗りの格子を嵌った旧家を見うけるのも珍しい<sup>10)</sup>。

第四階級でも新参である俸給労働者、いわゆるホワイトカラー・サラリーマンの居住の状況も、この方面では「安価な文化色」と副題をつけられ紹介される。

澤上江六丁目のガードから以北には、所謂文化住宅の夢を見がちな勤め人の趣向にできするような赤や青のタイルの粗雑な住宅街が、あちこちに出来ている。それだけに周囲の街は、ごみごみしているが居住者が一見フレッシュな感がある。勿論フレッシュといっても、いずこもお定まりのように、今時のサラリーマンは陰鬱ではあるが、・・・中略・・・。裏通りにはいると、安月給とりの巣窟のようである<sup>11)</sup>。

#### VI-2 インナーリングの工場労働者

こうしたサラリーマンの新生活スタイルについては、インナーリングの外側のアウトerringでより典型的に叙述される。サラリーマンはどちらかというところとしたアウトerringの市街地景観の主役であったからである。インナーリングの主役は、第四階級の中心である工場労働者

働者であった。インナーリングの西北部は、既述したように、安治川沿いに立地する、大阪造船、汽車会社、住友製鋼、住友伸銅、住友電線、大阪瓦斯に代表される大工場の西六社に勤める職工の集住するエリアでもあった。労働運動では友愛会、後の総同盟の関西本部があり、職工学校もあり、独特の雰囲気を持つエリアであった。

西野田は、総括的に見ますと決して「貧し過ぎる」町ではありません。北に蒲江大仁の大工場区を持ち南に堂島川を距て、大商業区に接し東は大阪の神経中枢梅田堂島に続いていて、他の新開地がややもすると「田舎臭」をいつ迄も持ち続け勝ちなのに引き換え、ここは如何にも澁刺とした都市の前衛と言う感じがします。労働運動に最も敏感なもの此所です。この点に掛けては大阪中の労働運動の神経中枢をなしているかの観があります。この辺にも勤人階級所謂インテリもかなり住まっていますが、他の新開地や住宅地に住っている者と気風の違っているのも妙です。自己悔悟と儉安と事大思想に傾き勝な勤人が、ここに住まっていると自主的になり果敢になり言を曲げて屈する事をしなくなります。土地の気風がそうなのですから、自然に染むのです<sup>12)</sup>。

西野田からさらに港湾部に、こうした西六社そのものを立地させる、現此花区、西九条から朝日橋をわたり、千鳥橋から四貫島にかけてのエリアでの、職工、プロレタリアの社会空間の内実は、ますます高揚する。当時のプロレタリア小説の舞台になったり、労働運動の地下組織がうごめいたりしたこのエリアは、次のように描かれる。

・・・爾來幾多の試練と波乱曲折を経て組合の結成発展が行われ、したがって果敢なる対資本家闘争も続出し、此の地域一帯の工場労働者の意識水準は、自然一般に高揚せしめられずにはいなかった。・・・中略・・・この様に、労働者自身の覚醒によって、労働運動を今日の如く、組織的たらしめたという意味に於いて、全国労働運動界の特殊地帯と見做されているほどで、

従って生活権獲得に於いても、今や此の地域一帯の工場労働者は、全市中最も有利な条件の許に置かれ、殆んど半永久的に彼等の生活が保証される状態までになったため、期せずして、半永久的労働者街が此の近辺に繁栄するに至ったとのことである。現在千鳥橋以西に於ける住宅は殆どが労働者に依って占められ、サラリーマンは一小部分にしかすぎないそうだ<sup>13)</sup>。

一瞥するだけでは、何の特徴も見られない、と下記のように形容されるこのエリアではあるが、プロレタリアの典型的な集住空間であることが見事に叙述される。しかもその生活はかなり保証された、ある程度豊かなものを獲得したことが伺える。その入り口に当たる千鳥橋近辺の電車道路の叙述が以下のように見られる。

両側は何れも間口二軒位の果物屋、古着屋、菓子屋、食器屋喫茶店等々と言った何の変哲もない平凡な店並び。小市民プロレタリアの住居を控えた商店街として、市中何処にも見られる、何らの新しい感覚をそそる刺激もない。何か変わった街頭風景でもと、大きくもない目を皿の様にしても、アッパッパの主婦が通り、板床の上では据わりがよいだろうお尻の大きい女中が通り、安背広の男が通り、自転車の小僧が走り、そしてたまに店番の鮮人が、更に老人が、子供が、女が、男が、相当に通ってはいるが、犬の喧嘩もなければ、噂に聞いた軍艦町の白首も見当たらない。此処の通行人の顔を、姿を、一々目の痛くなるほど点検しても、誰一人、近代的な神経質も叡智美も認められない。それは教養の低さと、生活のレベルを裏書する機械的で無表情な、下手な人形師の造ったロボットの群なのだ<sup>14)</sup>。

このような西北部の職工街に比較して、同じ港湾部の工場地帯でもある西南部の大正区もプロレタリアの集住地区の性格を持つ。1897年の第一次編入で大阪市となったが、いわゆるインナーリングとしての性格を有したのは、北東端の三軒家や泉尾のエリアのみで、大半の地域はより外方の新田エリアの低湿な土地であり、木津川ぞいに有名な造船工場を有し、労働者は、

渡船などで通うというような実態であった。小林などの低湿な土地が木材市場として大正後期から開発されるとともに、沖縄出身者も集住してきたことは、既に触れたとおりである。

その西南部は、なお広漠なる空地で、着々地揚げ工事が行われており、港湾の改良事業が進捗にするにつれ、水運の便が開けて、木材市場をはじめ、各種工業地として、ますます優秀なる位置を占めるにいたったのであるが、・・・中略・・・。大正橋、三軒家、泉尾、小林町といった順序で電車は走るのだが、小林町から新千歳橋、南恩加島町付近一帯は、広々と雑草の繁茂した草バラで、転々と家々が佇し佇立している状態である。電車の窓から僕は、木津川運河を遠望する。煤煙で灰色に曇った空の下に、たくさんの工場の煙突が黒い煙を吐いている<sup>15)</sup>。

### VI-3 インナーリングと朝鮮人

上述の大正区の状況は図9で如実にうかがうことができよう。工場や飛行場などの土木・建設ラッシュで、そこに労働力として必要とされる朝鮮人が大正末期より、本エリアに集住しはじめる。いくつかの土木工事によって朝鮮人の労働力が利用されてゆく中で、最低限の居住条件にて、場合によればイリーガルな占拠という形で、居住地区が形成され、また追い立てられるという経緯を港湾部では特にたどらざるを得ない状況があった。この地域はそうした朝鮮人居住プロセスの典型をあらわしている。そして大阪市社会部もバラック居住の朝鮮人についてその状況を昭和初年に調査している<sup>16)</sup>。

電車の軌道に沿って、大運橋通に出、木津川筋千本松渡船場附近を歩く人は誰しもこの地のミジンも情緒的雰囲気のない実質的な貧民長屋に一驚するであろう。この一帯は南恩加島町といい、朝鮮人の割拠地である。・・・中略・・・長屋にはさまれて、一寸小奇麗な事務所がある。内鮮協和会といい、木津川職業紹介所、木津川隣保館という立掛がある。国際飛行場が現れない前の、ある日の大阪日日新聞に次のような記事が掲載されている。「鮮人の内地へ移住するものは日を遂いで激増するに反して「生活の糧」

ともなる職が少なく何かと恵まれざるは、まだしもとして、住むに家なく漸く附近の雑木や蓆を集めて堀立小屋を造り漸く雨露を凌ぎ居るものはその大半を占めている。・・・」・・・(中略この近辺に住む：水内注)、合計千七百五十三名の人は十数年前終日終夜粒々辛苦して低廉な賃金で埋め立て工事をした」という土に対する愛着からして、——尤も一面から言えば土地権を無視したとの議もあろうが、——住み馴れた堀立小屋は、今や国際飛行場の敷地として追われる運命に逢着しているのである<sup>17)</sup>。

同じ工場地帯でも内陸のインナーリングでは、かなり様相の異なる発展状況を見せていた。確かに東部の工場発展も海岸部と同様に進み、それとともに安価な街づくりの進んだことがわかる。

鳴野南瓜、とさえ言われた頃の、農村鳴野の面影は、今は全く減んでしまった。大小の工場の喧騒。ごみごみと密集した小さい家の間を廻った、狭い道、毒々しい色彩の看板を上げたカフェー・鳴野の町の持つ感じは、おおよそ優美な名に値せぬものだ<sup>18)</sup>。

この鳴野の西に大阪城内にどっかりと腰を下ろした、巨大な大阪砲兵工廠があった。しかし工廠を除きこのエリアの大部分が中小工場で占められていた。鳴野近辺の平野川、第2寝屋川付近の今福、中本の状況は以下のように叙述されていた。

このあたり一帯は工場地帯である。これという目星の工場は一つもないが、職工二十人、三十人の小工場がドッサリある。住んでいる人々も工場で働く人が多くそうした人々の中に、朝鮮同胞の四千人があるのだ。この四千人をめぐって、この辺では借家問題が、いつもごたごたしている。・・・中略・・・労働者街であるだけに、不景気は深刻にこたえる。大工場でさえも立ち行かぬと言う時代なのだから皆失業の危険に直面している。失業しても、故郷に帰りもしないで、やっぱりこの辺に居っている様である。そこへ、他から入り込んで来る人もあった。人口は増える一方で、空家も



少ないが、密度はだんだん濃くなって行く。・・・  
中略・・・この方面の問題は、内鮮融和という  
ことで終始するだろう<sup>19)</sup>。

朝鮮人集住では最大の規模を有する東部のインナーリング、鶴橋、中本地区の状況を適確に叙述していよう。誌面の性格上、朝鮮人の抱える問題を、内鮮融和という形で、既述した協和会を軸にコミュニティの維持を図ってゆこうとすることが、必ず記事化されている。いずれにしても朝鮮人や工場労働者の居住分化の状況に、本誌はきわめて多弁であることがよくうかがえる。

#### VI-4 アウターリングの地理的諸相

一方この連載では、インナーリングより外のアウターリングの市街地化、特に俸給生活者の集住を中心とする新しい社会空間の登場にも、多くの誌面を割いている。同心円状を基本にしたプロレタリアの居住分化に、セクター状の俸給生活者の分布の見られることは既に指摘した。最もこうした俸給生活者の集住が見られる上町台地上の阿倍野区、以下では現在のあべの筋にあたる当時の阪堺国道筋の記述を以下に見てみよう。

阿部野橋の主要部との分岐点を発し大和川畔に至る坦々一里余の舗装道路がこれである。旧紀州街道の殷賑を東部の上町線に奪ってこの新道路は、その左右に逃避した市民の適応した住宅地を殖繁した。虫と納涼の名所図会であったこの界限は、田園的な牧歌を憶わす知的人種のよき場所として更生してきた。・・・中略・・・インテリ人種の安息所 東天下茶屋に至る帯状の町は、知識階級人の夜の安息にふさわしい諸般の設備をなし、且つてのブルジョア階級街を、適当の町に変え、ブルジョワ階級を、遙か南海の海岸線及び阪神沿線に追いやった。小市民的安価な生存はこうして生まれ、マーケットを中心とした小住宅の並列、遊戯場乃至はキャフエが著しく増加したのである。マーケットに於ける考現学は、その町の人種を判別させるものであり、若いインテリ主婦の、収支計算簿に・・・中略・・・。浴場の、旧市部に現れない立派な

設備、散歩道を基本として営まれつつある各種の営業状態なども、如何にインテリ趣味を尊重しつつあるかを十分に得心させるものがある。試みにステーキをとって散歩せんか——、坦々たる道は、灯ともし頃より活気を呈し、若きサラリーマン夫婦の円満なる点綴を見せる。洋画材料店、洋雑貨店、喫茶寮、花屋、文房具店、書籍店、麻雀等等がほのかな夜の空気に、インテリ人種に瞬きを投げている。前項で落としたが、周囲部の現象は実に不思議なる明暗色を見せている。例えば工場街を中心とする逃避市民の集団、株式取引街を中心とする逃避市民の集団、役人を中心とする逃避市民の集団——の如く、大大阪の地図の最境界線に近き新興街のスナップは、かのゲルマン民族の偉大なる移動の如く自然的な集団をつくっている。労働者街。遊玄人街。役人街。商人街。大工、手伝、左官の如き職人街。手工業者街。サラリーマン街。の如くここ数年の日月は奇現象をつくったのである。で、この阪堺国道街は前述の如く、小市民を中心として各種営業は整備されたのである<sup>20)</sup>。

実に見事に、大阪市の階層別の居住分化の現状とその経緯を描いている。もともと天下茶屋などで、会社経営者や自営業者の別宅、別荘としての郊外住宅地として、ここで述べているようにブルジョア階級としての市街地化は、最近では浜寺や阪神間にゆずって、知識階級、インテリ階級の街として、阪堺電車沿いが市街地化してきたことを述べている。すなわち、こうしたインテリ階級の居住スタイルが満たされる生活空間が登場しており、アウターリングでの逃避市民による居住分化を指摘している。大阪市内では、インテリ階級と呼ばれる層を多く含む俸給生活者の集住は、東京ほどには顕著に見られず、市外の郊外地に見られたが、それでも、この上町台地上のエリア、たとえば阪和電鉄（現JR 阪和線）や、新線化・複々線化した京阪電車沿線にて、東京の西郊に見られるような、若き俸給生活者や夫婦者の郊外生活風景が見られたのである。

この駅附近のモダン名所と云ったらおかし

いが、名づけてアパート風景とでも云おうか、とてもアパートの影が多いのだ。阪和電鉄南田辺駅南第一踏切近く鶴ヶ丘アパートがあり、洋風のモダン建築で外観は薄い緑色で悪くはない感じだ。池の近くにはレーキサイドハウスが・・・中略・・・富士アパートがある。白壁に赤茶色の薔、まるで欧州のアルプス山麓にある建物のような感じで、外観から受ける感じは一番いい。・・・中略・・・このあたりは独身者が少なく夫婦者、それも子供の出来ていない。甘い夢の見つけと言ったような組が多いらしい。・・・中略・・・いつぞや東京の友人とこの附近を散策した時に友人は「全く新しいところだね、僕は東京に十分長らくおるのでもあるが、東京に戻ったような感じだ。丁度目蒲電車の沿線で武蔵小山と言う駅があるんだよ。降りてすぐに戸越銀座と言われる新開地があるんだ。駅とその附近がまるでそっくりだよ。なつかしい気持ちだ」と感心したように話した<sup>21)</sup>。

東京の高円寺附近が、やはり駅を中心に、町が広がって、文士仲間では、高円寺ブラは、新ブラに続くものぐらいには思われている。森小路ブラもなかなかいいに相違ない。ラジオ屋があっちこっちにあって、歩きながら「打ちました、打ちました」という、野球放送も続けて聞いている。「立教がX点になったよ。今度は君におごらせなくっちゃ」なんかとやれもする。ダンスの心得があれば、フオクストロットのステップもふめ様というものだ。そこへ高島屋の出張で十銭二十銭の均一店がハイカラな洋館で目をひく、中はお客さまではちきれ相だ。関屋敏子の唄がひょいとカフェーの窓から逃げて来たりするのも面白い、路が狭いだけに、よけい面白いかも知れぬ。京阪百貨店も近日開業と言うから、森小路もなかなか立派なモダン都市を形づくるわけだ<sup>22)</sup>。

一方、少々毛色の異なる市街地化が進んだのが、築港方面であろう。一般的に海岸部には生産機能や、物流機能がはりつくなかで、大阪のこの築港方面は、確かに中小工場などを九条や境川運河エリアに多く持つものの、大阪港に近いエリアでは、市岡パラダイスや港新地といっ

た遊興機能を併せ持っていた。確かに工場労働者は多く居住するものの、その色はあまり前面に出ないエリアであった。こうした状況は、図7の俸給生活者の分布からも判明し、下記の大阪港に向かう電車通りの夕風橋付近の描写にも典型的にうかがうことができる。

この付近は大大阪の街なかを爆走するタクシイの過半数の棲息地帯だったなあ。自動車の街。ガレエゴの街。自動車部分品の街。噴霧器が自動車のボディにラッカアを吹き付ける街。・・・中略・・・カフェが多いなあ。カフェ、カフェだ。もうかるんだろうか。もう何年前になるだろうか。十年になるから。この辺一帯にあしが繁茂していたのは。川もあったよ、池も。川には清楚な水が流れていたね。・・・中略・・・から十年たった。変われば変わるもんだ今じゃ、ビルディングが。カフェが。おでん屋が。蓄音機屋が。薬局が。洋品雑貨屋が。・・・中略・・・。伝統を虐殺する街の匂いがするよ。この付近は面白いよ。オチャヤがある。劇場が。寄席が。温泉が。なんでもあるね。生産面のソレでなく消費面のアレが。」<sup>23)</sup>

より明白にこうした娯楽施設の誘致が、市街地発展の鍵とさせられたのが、東部のアウトーリングの土地区画整理地区に進出した遊廓であった。遊廓の今里新地の開設が、新興地開発の起爆剤とされたが、南部の飛田遊廓、西部の港新地など、遊郭は都市発展の核となった。

田園変じて絃歌の巷 今里土地の出現 東大阪南部の中心地今里付近は、今里新地、片江、大今里のトリオに依って完成される。両三年前、突如として「芸妓住宅指定地」と記された棒杭が田んぼの真ん中に建てられた。間もなく周囲の工作が歇んで「今里土地株式会社経営地」の棒杭がもう一本加えられた。それから瞬く間に四囲の状況がいっぺんされ、絃歌湧く脂粉漲る巷になろうとは、誰が予知し得たであろう。・・・中略・・・その今里片江が僅両三年の間に今日の股賑を極むるに至った裏面に、営利会社とは言え此の土地会社の出現は重大なパートを勤めていることは認めねばならない<sup>24)</sup>。

東南部から東部、そして東北部、北部のアウトターリングでは、土地区画整理にもとづく計画的な都市開発が、昭和初期から大々的に行われることになった。この形式の開発は、1941年ごろまでに徹底的に進められ、アウトターリングは土地区画整理エリアで埋め尽くされ、市街地化もどんどん進むことになった。

今福、野江、清水、森小路に亘る大区画整理地の風景は大大阪市としては異色あるものである。大都市の目貫とまでは行かなくとも、その動脈の一つたる京阪沿線にこれほどの大きな野原があろうとは、誰もが想像しなかったところであろう。見はるかすかかなたに、村落が、小さく見える。豆のような電車が走り、遠くかすかに巨大な瓦斯タンクがみえるところたしかに都市の外廓だという香はする。・・・中略・・・すでに道路は、幾何学的な線をもって、将来の街路をすでに截然と規定している。新開地の風景ではないかもしれない。しかし未開地と、新開地との中間の風景ではある。将来ここにギッシリと家の埋まった日には、ここに雲雀がこんなにたくさん、あちらにも、こちらにも囀っていること誰が想像することができようか<sup>25)</sup>。

このように昭和期になると、アウトターリングは土地区画整理による整然とした市街地が現れることになる。ただすべてのエリアで俸給生活者の住宅地がはりついたわけではなく、工場街として、工場労働者のはりつくアウトターリングも登場してくる。アウトターリングの描写の最後に、淀川以北の北西部の状況を引用しておく。

動く大阪。堂々たる生産面に立って、大阪は四方八方に手を振り、足を伸ばして動いているのだ。・・・中略・・・一日、私は大阪の西の手に触れて見た。野田阪神、姫島、大和田、蒲島、佃が大阪の西手の五指か。・・・中略・・・。千舟は大和田、蒲島、佃の三つに三分される。大和田は商人の地そして亦享楽の面。蒲島は知識階級の地。佃は労働階級の地。・・・中略・・・（土地区画整理の行われているその佃の工場街では：水内注）道から見える女達の腰の赤旗。

カーキ色の服。文芸戦線の古本。メーデーゴッコ。蒼白い栄養不良の顔。此の煙と歯車と汗と貧困の町を歩む・・・<sup>26)</sup>。

#### VI-5 再びインナーリングにもどって

最後に再びインナーリングの核心エリアに立ち戻ってみよう。如上の連載が行われた少し前に、インナーリングの南北の都市下層の地の紹介がある。それぞれ「今宮・釜ヶ崎・断面」、「天六のスナッフ」と題されている。

大阪の江東——今宮、釜ヶ崎、科学の文化の構成から転落した儘の姿を、何ヶ月振りかの訪問をする私に見せる。これがスネた者の遺産として建設され画成された特異な街の生きている呼吸だったろうか——。暗い街は、暗く燃えて生きていた。弓を張ったように、ぐんと曲がった省線の一つの遮断機、其処からの世界が、空気も、人も、光も、言葉も、不文律も、酒も、何もかもを私達の街と変えていた<sup>27)</sup>。

新京阪線と市電長柄線とが、旧豊崎町を中央から二つに割ってから、もう一昔近くなる。この二条の大動脈は、農村から一躍して新興工業地帯となって、馬屋と納屋と畑と石炭と煙突と不良住宅とが混在し、名状し難い不良の一地区を、一新するに非常に力があつた。しかし一方裏通りや付近の空地に足を踏み入れると、昔よりいっそう高度化したエロとグロとの風景が展開されている<sup>28)</sup>。

これ以上の引用はしないが、引き続き都市下層、都市雑業の人々の集住する場所として、若干の改善は見られるものの、「機能」し続けている状況が見て取れよう。既述したように、多くの社会調査や実際の施設は、これらの地域に投下され、日本橋筋の裏街区や釜ヶ崎には、モダンな改良住宅も実際に建設されたのである。しかしこのインナーリングの核心エリアに対する、大阪の人々の心象地理は拭いがたいものであった。同心円状と一部セクター上の空間構造は、ますます強化され、その中で、釜ヶ崎や長柄に対するネガティブなイメージは、弱まることはなかったようである。

確かに1945年3月から6月にかけて、米軍の空襲により市街地のかなりの部分が焼失し、特に戦前のインナーリングや、港湾部は灰燼に帰した。釜ヶ崎についても、ほぼ全焼状態であった。しかしながら現在の野宿生活者の問題を直視しても、この釜ヶ崎の空間は、問題の本質の核心部分であり続けたのである。「(「戦後の国勢調査で集計された「浮浪者」の：水内注)空間的分布についてはさして相違はなく、南部コアエリアには、戦前から既に、関一市長が率先した都市社会政策の空間的受け皿として、職業紹介所、共同宿泊所や市営アパートなどが建設され、そうした労働福祉政策の蓄積が、貧困エリア、細民窟、木賃宿街の性格を強化していた。また戦後も、一貫して「浮浪者」にとって近い空間として存在し続け、そのような空間として留保されてきたのである。その意味で市民のこの南部コアエリアに対する心象地理は塗り替えられてはいない。」<sup>29)</sup>

## 付記

本稿は、水岡不二雄編『経済・社会の地理学』有斐閣、2002年所収の、水内執筆第10章「世界都市の貧困、差別、都市社会運動」の一部を下敷きにして、2003年1月14日に COE プロジェクト、華東師範大学設置の上海サブセンター開所記念第1回ラウンドテーブルにて、「大阪における貧困・差別と都市政策の歴史的展開」として発表した<sup>30)</sup>。その前半部分を大幅に加筆・修正し、図を新たに加えたのがⅠ～Ⅲ、Ⅴ章である。Ⅳ、Ⅵ章は新たに書き下ろした。

## 注

1. E・ソジャ（加藤政洋・西部均・水内俊雄・長尾謙吉・大城直樹訳）『ポストモダン地理学—批判的社会理論の空間的位相』青土社、2003年、第7章
2. のびしょうじ「被差別集落絵図論序説」、大阪人権博物館編『絵図の世界と被差別民』、大阪人権博物館、2001年所収、131-163頁。引用箇所

は151頁

3. 横山源之助『日本の下層社会』1899年、53頁
4. 『職工事情 第二巻』生活社、1948年、153頁
5. 水内俊雄「戦前大都市における貧困階層の過密居住地区とその居住環境改善事業—昭和2年の不良住宅地区改良法をめぐって—」『人文地理』36-4、1984年、299-321頁
6. 大阪市社会部「本市に於ける隣保事業」『社会部報告』218号、1937年、4頁
7. 大阪市社会部「水上生活者の生活と労働」『社会部報告』124号、1930年
8. 草西正夫「大大阪新開地風景Ⅰ 玉造駅付近 東大阪の心臓」『大大阪』9-4、1933年、60-61頁
9. 高瀬嘉男「大大阪新開地風景Ⅱ 東野田・都島・片町・桜宮」『大大阪』8-13、1932年、93頁
10. 高瀬嘉男前掲論文、92頁
11. 高瀬嘉男前掲論文、93頁
12. 和田有司「大大阪新開地風景Ⅲ 西野田展望」『大大阪』8-12、1932年、53-54頁
13. 酒井義雄「大大阪新開地風景Ⅳ 探訪的に描いた千鳥橋・四貫島」『大大阪』8-11、1932年、96頁
14. 上掲酒井義雄、91頁
15. 小出六郎「大大阪新開地風景Ⅴ 大正区ところどころ 木津川運河、大運橋、鶴町」『大大阪』9-1、1933年、38-39頁
16. 大阪市社会部「バラック居住朝鮮人の労働と生活」『社会部報告』51号、1927年
17. 前掲小出六郎、42-43頁
18. 小滝冬三「大大阪新開地風景Ⅵ 旭区ところどころ 都会と田舎のカクテル」『大大阪』9-1、1933年、26頁
19. 尾関岩二「大大阪新開地風景Ⅶ 森小路付近」『大大阪』8-7、1932年、134-135頁
20. 上井 榊「大大阪新開地風景Ⅷ 新阪堺国道沿線街 小役人と学生の街」『大大阪』8-10、1932年、25-26頁
21. 瀬古貞治「大大阪新開地風景Ⅸ 田辺付近の新開地を見る」『大大阪』9-11、1933年、116-117頁
22. 尾関前掲論文、138頁

23. 近藤 孝「大大阪新開地風景 K 夕風橋付近散景抄」『大大阪』9-9, 1933年, 58-60頁
24. 小松一郎「大大阪新開地風景 今里新地」『大大阪』8-8, 1932年, 77頁
25. 尾関前掲論文, 135-136頁
26. 武田徳倫「大大阪新開地風景 千船」『大大阪』8-7, 1932年, 139-140, 143頁
27. 上井 榊「今宮・釜ヶ崎・断面」『大大阪』8-5, 1932年, 117頁
28. 志賀志那人「天六のスナップ」『大大阪』8-5, 1932年, 112頁
29. 水内俊雄「都市大阪の光と陰」, 森田洋司編『落層—野宿に生きる—』日経大阪 PR, 2001年, 157-158頁
30. この報告は以下に英語化されている。Toshio Mizuuchi, “The Historical Transformation of Poverty, Discrimination, and Urban Policy in Japanese City: The Case of Osaka.” In Toshio Mizuuchi ed. *Representing Local Places and Raising Voices from Below*, Osaka City University, 2003, pp.12-30.

## Spatial Structure and Residential Segregation in Modern Osaka

Toshio MIZUUCHI

Osaka is the city that has pursued capitalist urban development most explicitly in Japan. Accordingly, the city has suffered inevitable urban and social problems caused by its capitalist development. In order to cope with these problems, Osaka has promoted a most progressive urban policy. This paper discusses the history of the problems of poverty and discrimination in Osaka and the development of urban policy in the context of this particular type of urban history. In this context, it clarifies the spatial characteristics of pre-war era Osaka by drawing various thematic maps which illustrate the distribution of poverty and the progress of urban social policies. In addition, this spatial structure is also demonstrated through an analysis of the geographical discourse that was employed in the journal : “Great Osaka”.

**Keywords :** spatial structure, residential segregation, modern city, Osaka, urban social policy